

二〇〇七年度大学入試センター試験 解説〈古典〉

第3問 古文 『兵部卿物語』

〔通釈〕

こうして（時間が）過ぎて行くうちに、（兵部卿の宮の）お気持ち（右大臣の姫君に）傾くというわけではないけれど、自然と心が慰む面もあったのだろうか、昼なども折り折りに（右大臣の姫君のもとに）おいでになって、碁を打ち、偏継ぎなど、さまざまな御遊びなどをなさるので、按察使の君は兵部卿の宮のお姿をつくづくと見るにつけても、あの夜な夜なの月光のもとで、はつきりとはしないながらも（愛おしく）見た人と食い違ふところがないので、「世の中にはこれほどまでに（私のもとへ）通って来ていた方に似ている人もいるものなのであろうか」と思うが、見慣れるにつれて、ものをおっしゃる声、たずまい、容姿、全てがその（自分のもとへ通って来ていた）人であるので、あまりに一人だけで悩んでいても気がかりなので、侍従にこうこうであると語りなされると、「やはりそうですか、私にもたいそう不思議に思われることが数々ございます。あの（中将様に）度々御供として御仕えしていた蔵人とか言った人が、ここにおりまして、格別に『宮の御乳母子である』と言って、（周囲の）人も並一通りでなく思っている様子である。昨日も（右大臣の姫君の夫である宮様が）宮中へ参上なさるといふことで、（この邸から）お出かけになられるのを見ますと、（中将様にあなた様の）度々の御手紙を持って行った御隨身も、（こちらのお屋敷で）『御前駆追ひする』と言って忙しそうな様子でございましたのは、あの中将は仮のお名前で、（本当は）宮でいらっしゃったのだろうか」と（言う）。

（それを聞いて按察使の君は）ますます気がひけて心がいたんで、「もしそうならば見つけられ申し上げたような時に、どうしよう。（姿を消したあとの私の）行方ははつきりとは聞かれることもないだろうと思つたのに、このような様子で（姿を）お見せ申し上げるようなことは、たいそう恥ずかしいことでも（あるだろう）」と、今更につらいので、宮がいらっしゃる時はうまくそつとその場を退きながら（自分の姿を）見せ申し上げまいと抵抗するが、「そういう私の態度を周囲の）人もどういふことであらうかと見とがめるであらうか」と、そのことも悩ましく、「どうであれ悩みが絶えない我が身であるなあ」と思うと、こういう場合にはありがちなように、涙が真っ先にこぼれてしまう。

ある日の昼頃、（あたりは）たいそう物静かで、「宮も今朝から宮中にお出かけになってしまった」と言つて、人々は、（右大臣の姫君の）御前でくつろぎながら、遊び興じていらつしやる。姫君は物に寄りかかつてうつむきかげんで、御習字、絵などを遊び半分書きなすつて、按察使の君にもその同じ紙に（字や絵を）書かせなさる。（右大臣の姫君は）さまざまな絵などを描き遊んでいた中に、垣根に菊などをお書きになって、「これはひどく下手だわね」とおっしゃつ

て、持っていらつしやった筆で墨をたいそう濃くお塗りになるので、按察使の君が、輝くような美しさでちよつとお笑いになって、その傍らに、初霜もまだ降りきらないというのに、どうして白菊は早くも色変わりした色を見せているのだろうか
と、たいそう小さく書き付けますと、姫君も微笑みなさりながら（これを）御覧になる。

ちよつどその時、兵部卿の宮が音も立てずに（部屋に）お入りになるので、御硯などを片付けることができるひまさえなく、（女房たちは）皆退出したが、姫君も（たわいもない遊びに興じていたのを）紛らわそうと扇を手探りしつつ物に寄りかかって座っていらつしやる。按察使の君は、他の人よりも特にたいそう困って、御几帳の後ろから退出したが、（兵部卿の宮は）どうお思いになったのだろう、しばらく眺めていらつしやって、あの行方が分からなくなってしまうわたりのことを、ふと思ひ出しなさらずは恋しく思われてならないので、（恋人との）かつての出来事の数々を繰り返し思い出しなさりつつ物に寄りかかってうつむきかげんになられると、御硯の入った箱のふたが開いていたので、（兵部卿の宮が）それを引き寄せなさり、以前に書いた御習字の（紙の陰の）、硯の下からのぞいている紙を手にとって御覧になるので、姫君はたいそう恥ずかしく思つて顔を赤らめて、横を向きなさる様子は、実には上品で、輝くような美しさである。

兵部卿の宮がつくづく（この紙を）御覧になると、白菊の歌を書き付けているその筆跡は、たった今思ひ出しなさらずっていた人が、（かつて姿を消す前に）「草の庵」と書き残した筆跡と紛れようもなく同じであるので、（そのことが）たいそう気がかりで、「さまざまにいろいろ書きましたねえ。（この筆跡は）誰であろう」と、何げないふりでお尋ねになるけれど、（右大臣の姫君は）ちよつと横を向いていらつしやるので、（兵部卿の宮が）幼い少女で御前に控えておりました者に、「この絵は誰が描いたのか。もしありのままに言ったなら、たいそうおもしろく私も描いてみせてやろう」とだましなされると、（その少女は）「この菊は姫御前がお描きになりました。『ひどく下手だ』とおっしゃって（墨で）書き消しなさるので、困って、按察使の君が、この歌を書き添えなさらしたのです」と語り申し上げるので、右大臣の姫君は「（この少女は配慮もなく）たいそう差し出がましいことをした」とお思いになって、（たわいもない遊びの子細を兵部卿の宮に知られてしまったことを）恥ずかしそうにしていらつしやる。

〔解説〕

問1

(ア) 「おろかならず／思ふ／さま／なり」と単語分けされる。「おろかなり」は「おろそかだ・いいかげんだ」などと訳す必修単語。「愚かだ」の意にならなくもないが、それならば問われることはないだろうから、その点から見ても正解が①である可能性は少ない。②や⑤で示されている意味は「おろかなり」の意ではないから、これらも正解にはならない。③では「おろかなり」の意は表されているものの、打消の助動詞「ず」の意味が無視されていて正しくない。④は「並一通りでなく」が「いいかげんでない」と同意で、「おろかならず」の意として正しいので、これが正解となる。

(イ) 「いと／よし／よし／しく／にほひやかなり」と単語分けされる。「よし／よし／しく」は、形容詞「由々し^{よしよし}」の連用形。「よし／よし」の形で覚えた者は少ないだろうが、必修単語「よしあり」と同意であるだろうと気がつけば、①「風情があり」・③「上品で」・⑤「奥ゆかしく」などが良さそうであると考えられるだろう。また、「にほひやかなり」は、名詞「にほひ」で覚えた者が多いと思われるが、「にほひ」とは「はなやかで照り映えるような美しさ」のことであるから、「にほひやかなり」も同意を表す形容動詞であろうと推測することができ、これに気がつけば、正解は③しかないことになる。

(ウ) 「うちそばみ／おはする」と単語分けされる。「うち」は動詞に付く接頭語。特に訳さなくて良いことが多いが、強いて訳す場合は「ちよつと」と訳すことが多い。また、「そばみ」は四段動詞「側む」の連用形。必修とは言いがたいが、漢字を当てはめて考えれば意味は明らかであるし、ここで右大臣の姫君が「横を向いて」いることは、傍線部(イ)の直前に「傍らそむき」とあることからわかり、正解は②となる。ちなみに「そばむ」は「そば向く」でも同じことであり、これは音の面から見ても「そむく」に近い。

問2 文法の学習をしていけば、「に・なり・なむ」の識別は必修であるので、たやすく解けるはずの問題である。

まず、aを含む「にや」であるが、これは直後に「ある・あらむ」などの係り結びの結びの省略があることで知られるパターンである。一方、独立している「に」で、直後に存在を示す意味を持つ動詞(あり・侍り・おはす等)があるものは、断定の助動詞「なり」の連用形であることが多いので、aは断定の助動詞「なり」の連用形であることになり、これを正しく判断できれば、正解候補は④と⑤の二つだけに絞られることになる。

次に、「にき・にけり」のように直後に過去の助動詞(き・けり)を伴って使われている「に」は、ほぼ完了の助動詞「ぬ」の連用形であると考えてよいが、cを含む「にし」は「にき」の「き」が連体形「し」になっている状態であるので、cは完了の助動詞「ぬ」の連用形であることになる。よって、aとcが分かると正解は⑤ということになる。

ちなみに、「はるかなり・静かなり」など「かかなり」となる語はナリ活用形容動詞であるので、bの「しめやかに」も形容動詞「しめやかに」の連用形であると考えられることができる。また、「一単語として独立している「に」で、そのまま「に」と訳しても意味が通ずるものは格助詞であるので、dは格助詞であることになる。

問3 センター試験の傍線部に関する説明問題では、傍線部の直前に正解を得るための根拠が書かれていることが多く、また、登場人物の心情を問われた場合には、その人物の会話部に正解を得る根拠が書かれていることが多い。

ここでは、按察使の君の「嘆く」原因を問うているので、傍線部の直前に書かれている按察使の君の会話部に着目さえできれば、正解はあっさり出てしまう。つまり、「さもあらば…」に「宮に見つけられたらどうしよう。こんな姿を見せるのは恥ずかしい」とあり、「人もいかなる…」に「周囲の人들도ういうことであろうかと見とがめるであろうか」と書かれていることが、そのまま選択肢①の内容となっているので、これが正解となる。

①以外の選択肢に書かれていることで本文にもはっきり書かれているのは、④の後半の「宮には自分の存在を隠し通さなければならぬ」だけである。

②の「宮への思いを捨てられない」や、④の「宮が身分を偽っていた理由をつきとめたい」などはありそうなことではあるが、本文のどこにも書かれていない。本文表現に沿って考えれば間違えようのない問題である。

問4 和歌の解釈の問題のように見えるが、実は、各選択肢で歌意を示している「」の部分ではなく、それ以外の部分が本文と合致しているかどうかを考えると正解が得られる問題。

本文全体から見て、①の「冷やかにして」は、按察使の君のすることは思えない。②は「宮仕えで気苦労が絶えない」が本文に書かれていない。④は「工夫」がおかしい。右大臣の姫君は自分で描いた菊の絵が下手だったので墨で塗りつぶしたのであって、これは何かの「工夫」とは言えない。⑤は「容色の衰えはじめた女性」を想起させる記述は、本文中にみあたらない。正解となる③は、「描いた白菊を姫君がすぐに塗りつぶしてしまった」等の表現が本文内容と完全に合致して誤りがない。

選択肢で「」付きで示されている歌意は、各選択肢あまり差がなく書かれているので、正解を決定する根拠にはならないが、和歌中の「置く（霜や露が降りる）・」あへず（しきらない）・うつる（色あせる・枯れる）」といった表現は、知っておきたい。

問5 問3の解説でも書いたが、登場人物の心情を問われた場合にはその人物の会話部に正解を得る根拠が書かれていることが多い。この設問で問われているのは姫君の心情であるから、直前の姫君の会話部「いと差し過ぎたり」が正解を得るヒントになりそうである。そして、この姫君の会話部は、「小さき童女」の会話部を受けて発せられているものであるから、童女の行為を「差し過ぎたり」と言っていることになる。ここまでの本文を見ると、右大臣の姫君は絵を描いたりして遊んでいたことを兵部卿の宮に隠そうとしているわけだから、宮に対してそれをばらしてしまった童女の行為は、姫君にしてみれば「出過ぎた行為」であるということになるだろう。つまり、「差し過ぎたり」は、童女に対してその行為をたしなめる言葉なのである。このことが正しく説明されているのは④。よって④が正解となる。

①の「按察使の君の様子が気の毒」、②の「自分が描いた絵のつたなさを恥ずかしく思っている」、③の「自らの教育が行き届かなかった」、⑤の全体は、本文に書かれていないので、これらは正解にならない。

問6 合致問題であるから、ひたすら本文と照合して考えれば正解は得られる。

②は「侍従は、そのことを見抜いていた」以降の内容が本文にない。③は「宮の目を避けようとしていることに気づき」以降の内容が本文にない。④は「侍従から知らされた」以降の内容が本文にない。⑥は「按察使の君を気に入る」以降の内容が本文にない。

正解となる①は、前半が第一段落に、後半が第二段落のはじめの会話部に書かれていることに合致する。また、同じく正解となる⑤は、前半が本文最初と第四段落に、後半が最終段落のはじめに書かれていることに合致する。

〔総括〕

問3～問6は、問い方は違っているが、結局は本文との合致を問うている問題である。ある程度の時間を古文の解答に当てることができたならば、選択肢に紛らわしさがないので、難しくなく正解できる問題である。ただし、漢文や現代文に時間をとられて、古文を解く時間が十分にとれなかった者は、大体の雰囲気からいかにもありそうな、しかし、実は本文に書かれていない内容の選択肢にひかれて間違ってしまったことだろう。センター国語では、時間配分を十分に考えて、それを実行することが重要であることも知っておきたい。

第4問 漢文 姚元之『竹葉亭雜記』

〔書き下し文〕

吾が郷の錢明経詩賦を善くす。毎歲督学の科歳に古詩を試みるに、錢は必ず冠軍たり。一歲題は天柱の賦たり。錢場に入る時、酒を飲むこと多きに過ぎ、竟に大酔し、号に入るに輒ち酣睡す。試を同じくする者、其の試ごとに首に居るを疾み、肯て之を呼びて醒めしめず。納卷の者其の旁らを通る有りて、乃ち之に告ぐ。錢始め惺然たるも、已に及ぶ無し。卒爾として題を問ひ、七言絶句一首を書す。詩に云ふ、

我揚子江頭に來りて望めば 一片の白雲数点の山

安くんぞ身を天柱の頂に置き 倒に日月の人間を走るを看るを得ん

学使卷を得て、評して云ふ「此の心胸中に幾雲夢を呑むかを知らず」と。仍りて第一に取る。

〔通釈〕

私の郷の錢明経は詩賦を作ることが得意であった。毎年、督学による科試と歳試の試験で古詩を作らせると、錢は必ず最上位の成績をおさめた。ある年の題は「天柱の賦」であった。錢は試験会場に入る時、酒を飲みすぎていて、とうとう泥酔し、部屋に入るやいなやぐすり眠ってしまった。一緒に受験していた者たちは、錢が試験のたびに首席になるのを憎んで、(錢が眠っているのを見ても) 敢えて声をかけて目覚めさせてやるうとしなかった。答案を回収する試験官が錢の部屋のそばを通りかかって声をかけた。(目をさました) 錢は始めぼんやりしていたが、すでに試験の残り時間がなかった。(それに気づいた錢は) いそいで試験の詩の題を尋ね、(長編の詩を作る余裕がないので) 七言絶句一首を書いた。その詩は次のようである。

揚子江のほとりに来て眺めると、

ひとひらの白い雲と幾つかの山があるばかりである。

なんとかして我が身を天柱のいただきに置いて、

太陽と月が人間界を巡ってゆくのを逆に上から眺めてみたいものだ。

試験官はその答案を見て、評して言った。「この人物の胸のうちには幾つの雲夢が広がっているのであろう。(なんと気宇壮大なことか)」と。そして(銭を)首席にしたのであった。

〔解説〕

問1 語の意味と熟語の問題。

文中の語(漢字)の意味・用法を選択肢の熟語で答える形の問題は、今までも頻出しているが、従来は、選択肢の熟語は、傍線部の漢字を含んだものであった。今回は傍線部の漢字を含んでいない熟語を並べた点に、新しい傾向が見られる。

(1)「善」は「よくす(複合サ変動詞)」と読み、「巧みにする。上手にする。心得がある」といった意味である。「能」と同義と言ってよい。この後の話の流れから見て、銭明経という人物は詩作が巧みであったことは明らかであるから、正解は②「特技」であろうが、動詞がほしい位置で、①「絶賛」・③「博覧」・④「愛好」・⑤「多作」が動詞にできるにもかかわらず、正解の②が動詞にできない点はやや不満が残る。

(2)「疾」は「にくみ(マ行四段・連用形)」と読む。字義としては①「病気」(やまい・やむ)・②「迅速」(はやい)・③「苦痛」(くるしむ・なやむ)の可能性もあるが、「試を同じくする者」が「其の(≡銭が)試ごと(≡冠軍≡成績最上位者)に居るを」に続けるにはそぐわない。また、単に文脈だけを考えれば、④の「閉口」も入らなくはないだろうが、直後の傍線部Aから見て、もう少し悪意があると考えるべきであろう。正解は⑤「憎悪」。

問2 語の読み方の問題。

読みの問題は二〇〇三年度の追試験以降必出であるが、例年は二カ所の読み方を、それぞれの①～⑤の選択肢から選ぶ形だったが、今回は三カ所の読み方の組合せの正しいものを一つ選ぶ形になった。

(ア)「竟」は「遂(二〇〇六年度既出)・終・卒」と同じで、「つひに」。「すでに」は「既・已」である。

(イ)「乃」は「則・即・便・輒(二〇〇四年度追試験既出)」などと同じで「すなはち」。「なほ」は「猶・尚」である。傍線部Dで「よりに」と読んで「仍」も「なほ」と読むことがある。

(ウ)「安」は①・④・⑤のように「いづくんぞ」とも、②・③のように「いづくにか」とも読むが、「いづくにか…ん」だと「どこに…だろうか、いやどこにも…ない」という反語形になって、問6でわかるようになっていて、絶句の第三句・第四句の解釈にあてはまらない。また、三カ所のうち最もわ

問3 傍線部の返り点の付け方と書き下し文、および解釈の組合せの問題。

かりやすい(i)の「乃(すなはち)」ができれば、(ウ)の①・④はいずれも「いづくんぞ」であるから、ポイントは(A)「竟」の正否ということになる。正解は①。

返り点の付け方と書き下し文(読み方)の組合せの問題は、以前非常によく出ていたものが、二〇〇五年度・二〇〇六年度と出なくなっていたのであるが、久々に復活した。さらに(ii)で解釈もセットになっている。解釈もセットのケースでは、文脈上どの意味が最もよくあてはまるかを考えて、そこから逆に読み方をさぐるという順序でもよい。

この場面は、泥酔して試験場で眠ってしまった銭明経に対して、毎回首席になる彼を「疾」んでいた受験生たちがどうしたのか、というところである。この傍線部のあと、試験官が声をかけて目がさめてぼんやりする、という流れがあるから、受験生たちはこのまま眠っていてもおうとして、わざと起こさなかったのであろう。

(ii)は③の意味がほしいところである。①は「目覚めさせた」、②は「声をかけて起こそうとした」が間違っているし、④・⑤はいずれも「使いの者」が何者であるのか不明である。そのような人物は登場しない。

(i)のほうも、①・③の「之の使ひ」が同様の理由で間違いである。「使」は②・④・⑤のように使役の「しむ」である。

ところで、この形の問題では、上段の返り点は下段の読み方どおりになっていることがふつうで、その点をチェックしても時間のむだである。もちろん、厳密にはそのような返り方がアリなのかどうか(たとえば、②のように読むには「呼之(而)不_レ肯_レ使_レ醒」という語順でなければならぬから、返り方としても本当は間違いである)というようなことはあるのだが、そこまでは受験レベルでは厳しいであろう。であるから、ポイントは読み方の正否と、そう読んだときの意味である。

②は「銭に声をかけたが目覚めさせることを承知しなかった」。「肯_不ず」は「承知する。賛成する」意の重要語である。声はかけていない。

④は「あえて声をかけず、行って目覚めさせた」。目覚めさせてもいない。

⑤は「あえて銭に声をかけて目覚めさせなかった」。これが(ii)の③と合致する。

正解は(i)が⑤、(ii)が③である。

問4 傍線部の前後の状況の説明の問題。

傍線部の前は「銭始め^{ぼんぜん}然たるも」、(ここには(注10)がある。(注10)の「ぼんやりすること」だけを考えれば、②の「事態が飲み込めなかった」、④の「気が動転した」、⑤の「意識が朦朧としていた」に近いように思われるが、決めかねる。

傍線部B「已に及ぶ無し」そのものは、「すでに及ばない」もう時間がない」ということであり、③が合致している。

問5 漢詩のきまり「押韻」の問題。

傍線部の後の「卒爾として」は(注)がつけてないが、「にわかにな。だしぬけに」という意味。③の「いそいで」、④の「あわてて」が合致する。場面を考えても、うっかり眠ってしまったのが、目がさめてもう時間がなければ、「いそいで」か「あわてて」が適切で、①「ひとまず」、②「落ち着いて」、⑤「強引に」はあてはまらない。③か④が適当と思われる。しかし、④は「解答用紙を取り戻すことはできないので」に明らかにキズがある。解答用紙を集められてしまったとは書いていないし、それでは「絶句一首を書」くこともできなくなる。正解は③。

散文の中に漢詩があつて、漢詩のきまりを問う問題は、二〇〇三年度以来である。漢詩のきまりの出題はほとんど押韻(偶数句末の空欄補充問題)である。

漢詩では、偶数句の末尾の字は必ず押韻する。母音のひびきをそろえると言えはわかりやすいかもしれない。七言の詩では第一句末も押韻する。

この詩は七言絶句(一句が七文字で、四句で構成)であるから、第一句末の「望」も、空欄になっている第二句末、第四句末の「間」とともに押韻するはずであるが、「ボウ(bou)」と「カン(kan)」ではどう見ても同じひびきではない。こういうケースは「韻のふみおとし」と言う。偶数句末は「ふみおとし」は絶対にならないので、この場合空欄に入る字は、「望」と同じ「オウ」のひびきではなく、「間」と同じ「アン」のひびきでなくてはならない。そこで、選択肢の語を読んでみると、①「淡」は「タン(tan)」、②「楼」は「ロウ(rou)」、③「雨」は「ウ(u)」、④「山」は「サン(san)」、⑤「鳥」は「チョウ(chou)」であるから、「アン」のひびきになるのは①「淡」か、④「山」である。

あとは(b)の解釈のどちらがいいかであるが、これは「一片の白雲」だけをとつても④であろう。①は「白い雲の切れ間」にも、「淡」を入れたと考えた場合の「数本の淡い光」にも無理がある。正解は④。

問6 傍線部の理由説明の問題。

選択肢のキズを探して消去していけばいいのであるが、ポイントは実は七言絶句の第三句・第四句の「安くんぞ身を天柱の頂に置き、倒に日月の人間を走るを見るを得ん」の解釈である。ここはなかなか難しい。というのは、「安くんぞ…ん」なのだから、ふつうに受験レベルの句法の勉強からすると反語形で、「どうして…だろうか、いや…ない」と訳すのであるが、「安くんぞ…を得ん」には「なんとかして…したいものだ」と詠嘆的な願望として訳すケースがあり、ここはその後者に該当しているからである。「なんとかして我が身を天柱のいただき(てっぺん)に置いて、太陽と月が人間の世界を巡つてゆくのをさかさまに見たいものだ」という意味になる。

①は詩句の解釈「太陽や月を背にしながら人間界まで駆けおりたい」も違うが、「不満はあつたが」もキズ。本文にそう思ったという根拠がない。

②はやはり詩の解釈の中の「逆方向に運行するのを」が間違ひ。常識的にもありえないことである。

③が正解。この選択肢の「気宇壮大」が、学使の言葉「此の人胸中に幾雲夢を呑むかを知らず」にあたっている。

④は詩の解釈の中の「逆立ちしながら」と、「あえて提出」が間違い。「やむをえず提出」なり「仕方なく提出」であって、「あえて」ではない。

⑤は詩の解釈の中の「太陽や月が人間界を走る」と「見上げたい」が間違い。天柱の「先端」は「先端」でも下のほうではなく「頂」に立つのであるから「見おろす」のである。「気にしない大らかな性格」も間違いである。